

いよいよ開館 壱岐市立一支国博物館

～ 地域資源による壱岐島活性化の方向性 ～



壱岐市長 しら かわ ひろ かず
白 川 博 一

昭和46年に、芦辺町役場入庁。

その後、経済、教育、税務、年金、介護、建設、合併協議等の担当として従事。

平成15年に芦辺町長、平成20年から現職。

はじめに

壱岐島は、九州本土と朝鮮半島との間を結ぶ玄界灘に浮かぶ島で、福岡県博多港より北西に約70キロメートル、佐賀県唐津東港から北に約40キロメートルの場所に位置します。島は、南北17キロメートル、東西15キロメートル、総面積約140平方キロメートルのなだらかな島で、一つの市としては、長崎県の他の市町と比べても規模は小さい方です。

この島に、日本で最新の博物館「い き こ く一支国博物館」が2010年3月14日(日)にグランドオープンします。博物館の開館にあたり、これまで行ってきた壱岐市の取組み実績と今後の活用策について紹介します。

1. 近年の長崎県における動向

地方分権が進み、地方の個性化、自立化が求められる時代において、長崎県は「地域の持つ歴史や文化を活かした地域づくり・人づくり・産業づくり」をスローガンに取り組んでいます。そのスローガンのもと、各市町では文化施設の建設、遺跡や史跡の復元整備が行われています。

長崎市においては、長崎奉行所立山役所の一部復元整備とあわせた長崎歴史文化博物館の建設をはじめ、長崎県美術館の建設、国指定史跡出島和蘭商館跡（通称：出島）の復元整備などが進められており、各施設のオープン後は全国各地から多くの人を訪れています。平戸市においても、「平戸からはじまった和蘭通商400年」を機に2011年のオープンに向けて、国指定史跡平戸和蘭商館跡の復元整備が進められています。

当市でも「海を介した日韓交流の拠点・国

指定特別史跡^{はる つじ}「原の辻遺跡」の復元整備に2004年から着手し、オープンに向けて工事を進めています。



整備が進む海の王都・原の辻遺跡

2. 壱岐の島に残る

国の宝・原の辻遺跡

原の辻遺跡は、島の南東部の^{ふかえ たばる}「深江田原」に広がる弥生時代（今から約2000年前）を代表する遺跡の1つです。

この時代の日本人は、中国大陸や朝鮮半島の最先端の技術や文化を求めて海を渡っていました。その中で、壱岐島は、中国大陸や朝鮮半島と日本本土の交流と交易の拠点として重要な役割を果たしていました。この時代の遺跡が島内約60カ所で確認されています。その遺跡の1つ、原の辻遺跡からは国内最大級の多重の環濠をはじめ、海の王都を象徴する日本最古の船着き場跡、大陸や半島との交流や交易の歴史を示す数多くの遺物が発見されていることから、中国の歴史書『魏志倭人伝』に記された「一支国^{い き こく}^{注1}」の拠点と特定されました。原の辻遺跡は『魏志倭人伝』に記載された国の位置と国の拠点の場所の両方が特

定された国内唯一の遺跡であり、国宝に相当する国特別史跡に指定されています。

注1…原文では「一大国」と記載されている

3. 博物館建設に至る経緯

2004年3月1日に、郷ノ浦町、勝本町、芦辺町、石田町の旧4町が合併し、壱岐市が誕生しました。旧町ではそれぞれの町の歴史を紹介する展示施設がありましたが、島全体の歴史を総合的に紹介する施設はありませんでした。ゆえに、旧4町の展示施設の在り方について議論がされる一方、「壱岐全体の歴史を紹介し・活かす博物館」の必要性がもちあがり、市民を交えて博物館建設に係る準備委員会を立ち上げ、意見交換を行い、博物館のあるべき姿についての構想が取りまとめられました。

ほぼ時期を同じくして、長崎県では県全体の埋蔵文化財保護行政の拠点となる県立の埋蔵文化財センター整備計画が進められていました。新たに建設するセンターの場所選定において、県内各地に候補地が挙がりましたが、「歴史を活かしたしまづくり」を掲げる壱岐市の方針と「地域の持つ歴史や文化を活かした地域づくり・人づくり・産業づくり」を掲げる長崎県の方針が一致し、壱岐島に建設することがまず決定しました。

次に、展示公開を主な目的とする博物館と調査研究を主な目的とする埋蔵文化財センターという2施設を建設するにあたり、生涯学習スペースや所蔵品収蔵庫など類似するス

ペースが多いことから、別棟ではなく一体的に整備することとなりました。類似するスペースを共有スペースとして活用することで、建設にかかるコストの大幅な削減を図り、効率的で機能的な施設づくりを実現しました。さらに、一体的に整備される施設は、島の地域振興の核として機能し、島内に残る歴史遺産などと有機的な連携を図り、島全体を研究、学習、体験、観光などの舞台として活用していくことを目的としました。

設置場所は、国指定特別史跡原の辻遺跡を見渡す丘陵部に決定しました。この場所（現建設地）に決定した背景には、大きく2つの理由が挙げられます。一つは、島の特性でもある海をテーマにした博物館であることを印象づける場所であること、二つ目は豊かな自然が残る島の景観を壊さない場所であることです。

海が見えるという条件だけでみれば、海岸沿いに建設すれば解決することができますが、ここでいう“海”とは“海を介した交流と交易の歴史”を意味しており、広大な海を見渡すことができることが条件でした。また、「海の王都」という響きだけ聞いて原の辻遺跡をはじめて訪れた人は、海岸沿いにある遺跡というイメージを持って現地に足を運びます。実際に現地（遺跡）に立つと周りは低い山に囲まれており、山のすぐ裏に広がる海を見ることができません。

これらのことを総合的に判断し、当所在地が選定されました。実際に建てられた施設の4階の展望室からは、原の辻遺跡の広がる深

江田原はもちろん、なだらかな島の地形や遠くは九州本土の山並みまで見ることができます。それだけでなく、海を越えて当時の一支国を訪れた来訪者が船を停泊させたと思われる内海湾や、湾から王都へとつながる幡鉢川、そして深江田原に広がる一支国の王都・原の辻を彷彿とさせる原風景に思いをはせることができます。



遺跡上空からみた内海湾

4. 壱岐しまづくりの方向性

「時空を翔るシルクロード・壱岐」を実現するにあたって3つのしまづくりの方向性を掲げました。その方向性とは「しまごと博物館」・「しまごと大学」・「しまごと元気館」の3つです。

1) しまごと博物館

しまごと博物館とは、名称の通り、島全体を博物館と捉える考え方です。展示しているものは博物館だけという発想ではなく、島全体に残る史跡や文化財も展示品と捉えることで島内の各地に動線を広げることを目的としています。壱岐の島には弥生時代を代表する

遺跡をはじめ、長崎県全体の約6割を占める約270基の古墳、島につくられた壱岐国の国分寺跡、元寇関連史跡、朝鮮出兵時に築かれた勝本城跡、鯨組関連史跡など時代を問わず、多くの遺跡や史跡が各地に残っているのが特徴です。

博物館の展示では、展示品に関する歴史や特徴などについて知り、「ホンモノ」に触れることができる島内の史跡や文化財では、つくられた場所や実際の大きさ、展示品が発見された時代背景や要因などについて知るといった組合せ型の展示見学動線をつくることで、これまでにないストーリー性と拡張性を持った見学を可能にします。

このしまごと博物館の実現は、施設内で展示品を見るだけではわからなかった感動や発見を体感することができます。

2) しまごとと大学

しまごとと大学とは、島全体を学習・研究の舞台として、市民から観光客、歴史愛好家から国内外の学生など様々なニーズにあった多様な学習メニューを実施することを目的としています。この学習メニューを通じて、壱岐の歴史を学び、壱岐のことを知ることで壱岐を親しみ愛する“壱岐ファン”を育成します。学んだことを活かし、ボランティアガイドや市民学講座の講師などの人材として活躍してもらえることを目指しています。

3) しまごとと元気館

しまごと元気館とは、島全体を舞台にした

多様な“体験”、“参画”、“食文化”を通じ、島内に住む市民同士や来島者との交流から生まれる“生きがい”や“誇り”を感じることで“元気”や“活力”を創出することを目的としています。壱岐を訪れた来島者を、壱岐ならではの体験や新鮮な食材でもてなすことで、市民参画型のしまづくり活動の場と機会をつくり、地場産業と観光関連産業などの発展に貢献します。

5. 壱岐しまづくり実現に向けた取り組み

事例1) 既存展示施設再編

旧4町の既存の展示施設再編ではすべて廃止するのではなく、新しくできる博物館のサテライト施設として、新たなコンセプトのもと、再整備することで一致しました。旧4町の展示施設が所蔵していた歴史系の資料や遺物は新しい博物館に集中し、展示公開します。農業に関連する民俗資料は、勝本町にある「風土記の丘歴史資料館」に、漁業に関する民俗資料は石田町にある「ふるさと資料館」に集



農業に関連した民俗資料を集めた資料館として再編される「風土記の丘歴史資料館」

め、1つのテーマに特化した資料館として再出発します。再編の中で廃止となった芦辺町にあった「まなびの館」は内装を改装し、現在は民間の事業所と賃貸契約を結び新たな用途で使用されています。スクラップ&ビルドの中で、すべて廃止するのではなく残すものは残し、廃止するものは他の目的で活用するといった整理を行うことで島内の各所にサテライト拠点を残しました。そうすることで、新しくつくられる博物館に一極集中するのではなく、島内各所を巡るための拠点を確保しました。

事例2) 原の辻遺跡の復元整備と周辺整備

博物館建設に先立って行われている原の辻遺跡の復元整備は『魏志倭人伝』に登場する「一支国」の世界をテーマに、王都の様子を現代に甦らせます。整備の対象は一支国の拠点だった居住区のある中心域、環濠集落を象徴する多重の環濠域、有力者が埋葬された墓域に加え、一支国の植栽を再現した弥生植物園や本物の遺跡を見ることができる遺構露出展示、遺跡案内の拠点となるガイダンス施設などの野外体験学習に活用できる場の整備も行っています。この復元整備は地中に埋まって見ることができない遺跡を見える形で表現した野外展示であり、原の辻遺跡を見渡す丘陵に建てられた博物館と連携することで、より効果的に活用することができる、博物館の展示の一つとして捉えることもできます。

遺跡の復元整備に合わせて周辺のインフラ整備も進んでいます。遺跡の景観を保護する

ため、遺跡内を流れる幡鈴川の護岸改良、遺跡内を縦断していた県道を丘陵の下に移すバイパス工事、遺跡内の電線地中化、当時の地形や植生の復元など、弥生の原風景に近づける取組みを進めています。

このように、遺跡だけでなく周辺を含めた総合的な整備を進めることで、ただの遺跡の復元整備に終わらせるのではなく周辺景観と一体となった壱岐独自の復元整備を実現します。



復元された物見やぐらと兵士が滞在する場

事例3) 散策ルートの整備

島内各地に残る遺跡や史跡まで足を運んでもらうための整備を行っています。島には約270基の古墳が残っており、その中でも約90基が島の中央部に集中しています。この中には全長91メートルの県下最大の前方後円墳である双六古墳そうろくこふんや直径60メートル級の兵瀬古墳ひょうぜこふん、おにいわや古墳おにいわやこふん、ささづか古墳ささづかこふん、鬼の窟古墳、笹塚古墳など長崎県最大級の円墳があります。これらの古墳は「壱岐古墳群」として国の史跡に指定されています。これらの大きな古墳の周辺には群集墳ぐんしゅうふんと呼ばれる直径20メートル程度の円墳が数十個単位で存在しており、倭寇の拠点として築かれたとも云われている生池城跡なまいけじょうや壱岐国の国分寺跡

など多くの古墳や文化財などが残っていることから、この一帯を結ぶ散策ルートを整備しています。整備は、ポイントごとに遺跡や史跡のつくられた時代背景や役割を紹介する解説板を、分岐点には目的地の方向と距離を示した案内板を設置しています。また、散策マップを作成し、この散策ルートを案内する市民ガイドも活躍します。



長崎県最大の前方後円墳 そうろうく 双穴古墳

事例4) 散策コースの発掘

既存の素材を活用し、散策コースを島内各地に設定し、しま巡りの範囲を拡大しています。島の最北端に位置する勝本浦は壱岐の中でも漁師まちの雰囲気の色濃く残す町並みの特徴です。勝本浦は、海を取り囲むように建



現在の勝本浦の様子

てられた連続する町屋の風情や歴史的建造物の数々、江戸時代から引き継がれてきた朝市、鯨組や朝鮮通信使に関する史跡など多くの散策ポイントが点在していることから、近年、町歩きコースとして脚光を浴びています。古墳群の散策コース同様、散策マップを作成し、ワンポイント情報を提供したり、コースを案内するガイドの育成が進められています。この他にも元寇関連や鯨組など様々な視点からコースづくりが行われています。

事例5) 壱岐学検定の実施

壱岐に関する歴史や文化、伝統や方言など様々なテーマについて学ぶことを「壱岐学」と総称し、これを題材としたご当地検定「壱岐学検定」を実施する準備を進めています。壱岐学検定に出題する問題は、市民の皆様から公募し、採用しています。博物館オープン後には、検定に向けた壱岐学講座を開講します。検定に合格することだけが目的ではなく、壱岐学で学んだことをガイドや市民講師などに活かしてもらうことも目指しています。

事例6) ランチプレートの創作

島内飲食店の中で広がってきているランチプレートは、主に女性をターゲットとした食事メニューを創作しています。食材に地場産のものを使うことと、提供値段を1,500円で統一することが条件にあります。その店舗が得意とする食材を中心にメニューが構成されていることから、それぞれの店舗が提供するランチプレートにはそれぞれの店の独自性が

あり魅力的です。彦岐牛メインだったり、新鮮な魚メインだったりと彦岐の新鮮な食材を利用した様々なランチプレートをご堪能ください。すでに数店舗が、このランチプレートの商品化していますが、これからもっと加盟店が増えていくことが期待されます。

6. 一支国博物館の役割

一支国博物館が果たす機能として、①島内各地に導くネットワークの拠点づくり、②彦岐の歴史・文化を伝え、人を育てる施設づくり、③五感を刺激し、感動・発見のある施設づくり、④彦岐島内外の様々な交流を創出する拠点づくり、⑤リピーターが集まる施設づくりが挙げられます。

「博物館」という名称には固いイメージがありますが、実際は展示を見るだけの施設ではないのが特徴です。もちろん彦岐の歴史・文化を後世に伝え残すという博物館としての使命を果たすことは当然の機能ですが、この施設は観光的な要素や市民のシンボリックな要素など、プラスアルファの機能が充実してい



3階 多目的ホール

ます。施設は地下1階、地上4階の構造になっており、主な展示スペースは1階と2階に集中しています。3階は生涯学習スペースや来館者の憩いの場・交流の場として使うことができます。また、ミニコンサートや映画会も可能な多目的ホールをはじめ、様々な体験メニューや試作商品のモニタリングなどを行うことができる体験交流室、憩いと交流の場として屋上展望広場や喫茶コーナー、多目的交流室などがあります。

7. 一支国博物館の特徴

一支国博物館の特徴といえば、やはり施設の外観が象徴的です。設計者は、全国に公募し、世界的に評価の高い建築家の故・黒川紀章氏が選ばれました。黒川氏が現地を訪れ、建設地を見た瞬間に描いたイメージスケッチがあります。そのイメージスケッチは弥生原風景を壊さないというテーマのもと、山の稜線に合わせ、彦岐の自然豊かな環境を最大限活かしたものでした。完成した建物イメージパース図を見ると、屋根は波打った曲線を描き、屋根をすべて緑化という斬新なものでした。今思うと、同氏が掲げる「自然との共生」の集大成ともいえる作品だったのではないかと感慨深く考えています。完成前に他界されたことは誠に残念でありませんが、同氏の国内での遺作がこの博物館であることを誇りに思います。

施設内にもこれまでにないスペースが設けられています。その一例としてオープン収蔵

庫があります。通常、収蔵庫というと暗い暗室の中にたくさんの収蔵品が収納されているというイメージがあるかと思いますが、当博物館では、その一方を全面ガラス張りにし、収蔵庫のスペースと収蔵量を体感することができます。また、収蔵状況を見せるだけでなく収蔵棚の棚板や収蔵ケースを無色透明の亚克力製にすることで、通常見ることができない角度から収蔵物を観察することができます。その収蔵棚の側面を使って収蔵品をテーマ別に展示する「オープン収蔵展示コーナー」も日本初の試みです。他にも、模擬発掘作業や模擬整理体験ができる「キッズこうこがく研究所」や、発掘品を整理する作業の様子を見ることができる「観察路」など様々な工夫が施されています。

展示においてもこれまでの博物館にはない試みを実現しています。展示は「壱岐の歴史」だけに留まらず「東アジアの中の壱岐の歴史」に焦点をあて、グローバルな視点で海を介した交流と交易の歴史を紹介しています。またこれまでの博物館が“展示品を見る博物館”だったのに対して“展示品に触ることができる博物館”を実現しています。展示品すべてではないものの、展示品の中には実際に触ることができるものもあることから、見るだけでは分からない情報を得ることで新たな発見と感動を創出し、楽しんでいただけます。「一支国トピック」では、一支国の世界を再現した空間がつくられており、展示品が“どのように使われていたのか”、“どんなシーンで使われていたのか”を模型と映像を使って解説

しているため、説明パネルを読まなくても知りたい情報がわかるような工夫をしています。

また、「市民参加による博物館づくり」を象徴する取組みもあります。例えば、公募により弥生人模型の顔モデルを募集し、採用者の顔を実際に模型の中で登場させる演出や、島内各地で2000年前の一支国を現代に甦らせる「シルクロードビューシアター」の撮影では、市民の方々がエキストラとして出演しています。つくる段階から市民参加を取り入れた取組みはこれまでにない新たな取組みとして注目されています。



海の王都を象徴する古代船の再現

8. 新たな指定管理者制度の導入

ここ数年で指定管理者制度が浸透し、様々な分野で導入されています。導入の効果はすでに長崎歴史文化博物館や長崎県美術館で実証されているとおりです。今回の博物館での新たな取組みは、博物館建設段階において建築設計+展示設計+指定管理者の3者を1つのグループとして公募し決定したことです。通常、指定管理者は建物完成後のいわゆる「既存施設」の管理者となります。しかし、今回

は建築設計段階で指定管理予定者を決定することで、運営面からの意見を建築や展示に反映させました。建築や展示設計の打合せには指定管理予定者も同席し、意見を交換しながら建物や展示を完成させたのです。この手法による指定管理者の選定方法は例がなく、日本初の事例として注目されています。

また、指定管理者制度では管理運営費を設定し、年間契約を結び、施設の管理運営をすべて委任するやり方が主流になっています。しかし、一支国博物館の管理運営業務の中で、収蔵品の管理は市が直営で行うようにしました。今回の指定管理業務の中には、調査研究部門を含んでいません。その分、運営に重点を置き、誘客対策や館内イベントなどを充実し、来館者へのおもてなしの質を上げることを目的としています。

歴史という分野は1日にして成るものではありません。1年、10年、100年と引き継がれてはじめて残るものです。やはり壱岐の歴史の調査研究は市が直営で行い、継承することが行政における文化財保護の使命ではないかと思っています。調査研究成果を展示に反映、企画展案の作成や図録内容の作成などで展示運営に積極的に関わり、指定管理者と連携してより良いものにしていくことが期待されています。さらに、同施設内には長崎県の埋蔵文化財センターも併設していることから、県・市・指定管理者の3者が密に連携することで施設が長崎県の振興、壱岐の地域振興に貢献していきます。行政でできることは行政で、民間でできることは民間で実施し、連携

を図ることで、「官民協働」の運営を実現します。

おわりに

以前、壱岐・原の辻展示館がオープンしたときに年間10万人の来館者があった実績から、今回も年間10万人以上の来館者を見込んでいます。想定している来館者数が博物館に訪れた場合、博物館だけでなく、島全体にその波及効果が期待されます。これを機に、落ち込んできている壱岐への来島者を増加に導き、他の地域からモデル事例として注目されるようなまちづくりを目指していきます。

壱岐のまちづくりは博物館の完成で終了ではなく、これからさらに進化していくのです。



平成22年3月14日(日)13:00 グランドオープン